

CIEC Newsletter

お知らせ

< CIEC 研究会 開催案内 >

・ CIEC 第 4 8 回研究会

日時：11月20日(土)
会場：大学生協杉並会館
主催：小中高部会

・ CIEC 第 4 9 回研究会

ESP 向け e-Learning の実践
日時：12月4日(土)
会場：立命館大学
主催：外国語教育研究部会

・ CIEC 第 5 0 回研究会

日時：12月11日(土)
会場：幕張メッセ
主催：生協職員部会

< CIEC 会員状況 > 04年10月

・個人会員	821		
教員	601	大学職員	18
院生	45	学生	10
生協職員	88	企業	26
研究員	8	その他	25
・団体会員	98		
企業	36	生協	59
大学	1	高校	1
法人	1		

CONTENTS

< PC カンファレンス >

- ・ 2004PC カンファレンス神戸 開催報告 2

< CIEC 研究会 開催報告 >

- ・ CIEC 第 44 回研究会報告 6
・ CIEC 第 45 回研究会報告 7
・ CIEC 第 46 回研究会報告 9

< CIEC 視察報告 >

- ・ 韓国訪問報告 11

< CIEC 活動報告 >

- ・ 2003 年度第 2 回 CIEC 理事会報告 12
・ 2004 年度第 1 回 CIEC 理事会報告 13
・ 2004 年度定例総会報告 14

< CIEC からのお知らせ >

- ・ 献本のお知らせ 15
・ CIEC 学会賞 受賞者のお知らせ 15
・ CIEC 会員 入退会員のお知らせ 16

来年・2005PC カンファレンスは、
朱鷺メッセ・新潟大学で行います。
2004PC カンファレンス同様よろしく
お願い致します！

News&Topics

< 2004PC カンファレンス報告 >

8月4日～6日の3日間、神戸大学六甲台地区で2004PCカンファレンスが開催されました。今回のテーマは「人が生きる道具としてのコンピュータ～ユニバーサル&ユビキタス コンピューティングをめざして～」です。875名の参加者を得て盛会のうちに終了致しました。

(1) 全体会

全体テーマ「人が生きる道具としてのコンピュータ～ユニバーサル&ユビキタス

コンピューティングをめざして～

開会挨拶 滝川 好夫 神戸大学

2004PC カンファレンス実行委員長

挨拶 武田 政義 兵庫県教育長

野上 智行 神戸大学学長

2004PC カンファレンス名誉実行委員長

司 会 鳥居 隆司 相山女学園大学

CIEC カンファレンス委員

(2) 講演会

演 題 「ユビキタスとエイリアネーション～どこにでもあるが故の疎外をいかにして克服するのか～」



辛坊 治郎 読売テレビ解説委員

<ユビキタス社会において予想される情報の属人的格差を考察し、「どこにでも存在する」ということと、「誰もが恩恵を受ける」ということの違いについて、時には笑いを誘いながらの巧みな話術に引き込まれました。

会場に入りきれず会場外に用意したモニター席も満席でした>

(3) シンポジウム

テーマ「メディアと教育」～学びのコンテンツを考える～

パネリスト

石井 和則 兵庫県立兵庫高等学校

石田 晴久 多摩美術大学

猪俣 富美子 東外大 AA 言語文化研究所

福島 健介 八王子市立七国小学校

司 会

筒井 洋一 京都精華大学

CIEC カンファレンス委員



<これまでのメディアリテラシー教育にとどまらず、メディアを媒介とした教育の抱える問題を再認識し、さらなる可能性を探求すべく企画されました>

(4) 開催地企画

テーマ「生きる道具としてのIT技術～被災地から生まれた防災に役立つコンピューティング～」

講演及びデモ1

阪神淡路大震災の教訓を踏まえた実践的な防災

システム ～「新フェニックス防災システム」～

曾根 孝 兵庫県企画管理部防災局防災通信室室長

講演及びデモ2

震災被害のデータベース化から安全な都市づくりに

～地理情報システム「神戸JIBANKUN」～

沖村 孝 神戸大学・都市安全研究センター

副センター長

<大震災の教訓を踏まえた防災関連のコンピュータシステムの実践例が講演とデモによって紹介されました>



(6) 小中高部会企画

「これでいいのか情報教育」

- 高等学校「情報」、中学校「技術・家庭」を検証する -

基調講演

「情報科の教科書に託した思いと現実そして課題」

林 英輔 麗澤大学

話題提供

1) 「六甲アイランド高校での情報科の実践報告」

山品 利男 六甲アイランド高等学校

2) 「技術家庭科『情報基礎』の実践報告」

松枝 英男 神戸市立丸山中学校

< 討論「これでいいのか教科情報」では、実際の授業運営の中で生じる様々な問題が議論されました >

(5) ワークショップ(開催地企画)

「国際コミュニケーションセンターにおける外国語支援体制の紹介およびワークショップ」

1 スピーキング(リスニング)

トレーニング診断システムの開発

(柏木治美 神戸大学)

2 CALL を用いた ESP 語彙力診断テスト

(石川慎一郎 神戸大学)

3 インターネットを活用した英語授業実践

(加藤雅之 神戸大学)

< スピーキング教材では自分の音声を録音したり、フォームを使ったWEB上の英語問題を解いたり、編集する体験型のワークショップで好評でした >



(7) 大学生協企画

「大学によるパソコン必携化への動きと、そのサポートのあり方」

アメリカ視察報告(板倉 隆夫 鹿児島大学)

パネリスト報告

榊原 正明 鳥取大学

竹田 尚彦 愛知教育大学

石黒 伸享 東京学芸大学生生活協同組合

< 大学におけるコンピュータの「必携化」、あわせて「サポート」をキーワードとしました。161名参加があり、50名近い先生方に参加いただきました >



(8) 分科会

発表総数158本(口頭発表128本、ポスターセッション30本)

今年はポスターセッション発表に表彰制度を設け、最優秀賞1名と優秀賞2名が選ばれました。

<ポスターセッション表彰>

- 最優秀賞：春山 祥一（如水会 特別部会委員）
「無線 LAN 利用促進のための学生の行動・意識調査と普及計画」
- 優秀賞：吉川 歩（神戸親和女子大学）
「代返防止出欠収集・匿名型授業評価収集システム」
- 優秀賞：綾 皓二郎（石巻専修大学）
「バーコードリーダーを用いた出欠管理システムの制作と運用」



(10) レセプション

- ・主催者挨拶
田中 学（全国大学生生活協同組合連合会理事長）
佐伯 胖（コンピュータ利用教育協議会会長）
- ・乾杯挨拶
井内 善臣（兵庫県立大学 2004PCC 実行委員）
- ・CIEC 学会表彰
赤間 道夫（CIEC 会誌編集委員長）報告
佐伯 胖（CIEC 会長）授与
- ・ポスター表彰
吉田 晴世（実行委員分科会責任者）報告
滝川 好夫（実行委員長）授与
- ・次期開催校挨拶 小林 昭三（新潟大学）



(9) ITフェア

- <最新の機器、ソフトが間近にみられるので、参加者に人気がある IT フェア会場の様子。54 社 76 ブースの出展で今年も賑わっていました。参加者からの質問にも親切に答えていただけます>



< CIEC 学会賞・功労賞授与の様子 >



- <功労賞> 受賞者： 奈良 久氏
受賞件名： CIEC を設立から学術団体会員となるに至るまで成熟させたことへの功労

<功労賞> 受賞者： 板倉 隆夫氏 熊澤 典良氏
吉野 孝氏
受賞件名： CIEC TypingClub の開発・改善と普及

<論文賞> 受賞者名： 妹尾 堅一郎氏
受賞件名：「学習コミュニティを支えるメディア環境：
「社会調査法」の6年 間に見る学習環境の変容」



<神戸牛のステーキ, 明石の海の幸天ぷら, 兵庫の銘酒
利き酒コーナーなど地元神戸・明石を中心にした兵庫県
の特色あるもてなしで参加者に喜ばれました



(11) イブニングトーク
1)「大学における理工系講義用イーラーニング教材の開
発と活用」
2)オープンソースソフトウェアで始める「eラーニン
グ」
3)大学生協の学生向けパソコン提案の取り組みの交流」

4)「家庭でのインターネット利用」
5)「なんだろう, 日本人の英語力」
<あいにくの雨でしたが, 約70名の参加がありました>

(12) CIEC 定例総会

2004 年度 CIEC 定例総会
日時： 2004 年 8 月 4 日午後 6 時 15 分 ~ 7 時 20 分
会場： 神戸大学 神大会館 六甲ホール
出席： 本人出席 56 名, 書面 76 通, 委任状 29 通



後援団体
神戸大学 / 神戸大学学術情報基盤センター / 文部科学
省 / 兵庫県教育委員会 / 神戸市教育委員会 / NHK神
戸放送局 / ラジオ関西 / 神戸新聞社 / 教育家庭新聞社
/ 現代教育新聞社 / 日本教育新聞社 / 近畿情報教育連
合 / 情報教育学研究会 / 日本情報倫理協会 / 兵庫県教
育工学研究会 / 兵庫県私立中学高等学校連合

＜ CIEC 第 44 回研究会 ＞

日時：2004年5月29日（土）14時～17時

会場：大学生協杉並会館2階会議室

1. 次世代テクノロジーとワイヤレスコンピューティング

（株）インテル・プラットフォーム&ソリューションマーケティング部菅原直人氏の発表は、ノートブック型のPCが一人に1台という環境の変化により大学の取り組み形式が変革されつつあり、大学のキャンパスにモバイル世代が到来していると述べた。その理由は、高いパフォーマンスを保ちながら電力消費の少ないキャッシュメモリを搭載し、使用されていないロジック部分への電力供給がカットされる設計のCPU、パソコン内の主要部品の接続やデータのやり取りの要となるチップセットの低消費電力化、そして無線LAN部品の設計段階からの省電力化などによって、デスクトップ並みの性能を持ちながら、数時間のバッテリー持続時間を実現する軽くて薄いモバイルPCが開発できたことを挙げた。



これらの特長を活かすことによって、企業では仕事のやり方を変え、業務のモバイル化・インフラコストの削減化など、またキャンパスでは様々な取組において高速化できるような環境整備が実現しつつあるが、特に教育の現場に適應できることを考えていくのが課題であると締めくくった。

2. アップルコンピュータの最新テクノロジーによる教育

活用 - 教育現場における Mac OS X の導入事例 -

安田伸幸氏（アップルコンピュータ（株）ディベロップメントエクゼクティブサーバーソリューション）は Mac OS X サーバーの紹介を行い、さらに

UNIX と Mac の関係についても触れた。Mac OS X の特徴は3つのアプリケーションと3つのグラフィックスを使える環境にあると説明した。また、ichat という新機能を設け、設定が簡単であること、UNIX ベースでありながらアプリケーションが豊富であることなどを挙げて使い易さを常に追求していることを強調した。Xサーバーの紹介では、UNIX ベース、業界標準を採用、GUIによる統合管理、オールインワンサーバ、クラスプラットフォームでも運用可であるなど常にユーザーの視点に立った開発を行っているとして述べた。



次に、movieSynch（ムービーシンク）のビデオ&スライド同期配信システムを使ったプレゼンテーションが行われた。大学の講義などがそのままオンラインコンテンツに作成できるシステムであることなどが紹介された。



＜CIEC 第45回研究会＞

プレカンファレンス

日時：2004年6月13日 13時30分～17時

会場：神戸大学 神大会館

司会 橋 孝博

開会挨拶 綾皓二郎

(敬称略)

1. 基調講演「勉強と学び」 佐伯胖氏

学級崩壊は幼稚園から大学まで起き、学力低下も小学校から大学まで広がっている。子供たちが学習そのものを否定し始めている。いまや「学びからの逃走」の時代となっている。学ぶということが高学歴を得る手段とみなした勉強はもはや通用しない。受験戦争の終焉し、あえて勉強する意味が失われている。子どもたちはお客となり、もっとびっくりするような知識やわくわくする体験がないとやらない。おもしろくないとやりたくない。なぜ学ぶのかがわからない。

今こそ「学びの転換」を図り、文化の豊かさ、深さを、人間全体として味わう学びにしていかなければならない。生活科や総合的な学習はもっと知的になることを目指す学びであるはずだ。

勉強とは、社会におけるなんらかの外的基準から「のぞましい」とされる知識や技能を他者からの教示にしたがって、練習を通して、獲得することであり、そこには必ず教師がいる、必ず正解がある。正解が出せるように練習する。

勉強の前にまず、学びがある。学びとは実践の共同体への正統的な周辺からの参加によるアイデンティティの形成である。学びは教育とは独立の営みで、教師の予定や考えとはまるで違った形の学びが生まれ得る。大人や先生が知らないインターネットの世界に子どもたちがどんどん入り込んでいる。また学びは、自分探しの旅でもあり、学ぶ意欲は学び手が共同体に受け入れられているといった実感があることから生まれる。

まとめると、「勉強」はできるようになることをめざした活動。「学び」はよいことを実現する実践にともなって「できてしまう」こと。本源的に充実した実践活動の中で互いに喜び合い、たたえ合い、賞賛の拍手を送るべきこと。本当の学びはどこか遊び心があるものだ。学力低下は「勉強」を強化することでは救えない。本当の学びを回復せよ。鑑識眼による評価を徹底せよ。勉強を学びに転換。「熱中した遊び学び」を学習に取り入れよ！学

びを実践共同体への参加にしよう！

質問1：参加には役割もあると思うが、あえて「役割」を出さなかった意味は？

アイデンティティから参加という立場で話した。参加には役割も含まれているだろう。

質問2：具体的な教育の中での実践はどうすべきか？

勉強と学びの違いを意識して実践していただきたい。

質問3：遊びと学びの定義は？

幼児教育で見ていると遊びも学びも区別はない。本来区別がないものだろう。チンパンジーもそうである。遊びを持たなかったら学びは生まれない。新しく作られる知識や技能は遊びから生まれる。

2. 実践報告(各10分)

1. ITを活用した学習の支援「小学校体育科器械運動における同期型動画コンテンツを通して」

下山裕子(小野市立大部小学校教諭)

小学校4年生の体育「跳び箱」の学習で、学習支援教材(模範演技コンテンツ・模範演技と児童の演技比較コンテンツなどのコンテンツ)を使用した取り組みの発表した。同期型動画コンテンツをSMIL(正面からの演技と側面からの演技を同時に見れる。)を使って作成した。模範演技と児童の演技比較コンテンツでは、比較しやすいように横からの撮影し演技比較とした。技のポイントコンテンツや練習ポイントコンテンツは、アニメーションを使って作成した。また、Webページによる教材掲示(いつでも、どこでも、見られるようにした)とした。授業では、体育館に4～5台のPCとビデオカメラを設置。撮影したビデオは次の時間までに編集しコンテンツ化した。

2. 子供はコンピュータで探求的に学べるか？

橋場弘和(神戸大学発達科学部附属中学校教諭)

「数学学習実践事例(関数グラフで絵をかこう)」において、GDRAW、口ゴ坊等のフリーウェアを使った実践を報告した。実践を振り返って、残念ながら子供たちに試行錯誤によって自ら探す姿は見られなかった。PCは子供に学びを起すだろう。そのためには子供が身に付けておかなければならない基本的な知識が多々ある。また支援の環境が必要。

3. 普通の授業での展開

吉田賢史(甲南高等学校・中学校教諭)

高校1年の数学の授業(どちらかというと数学嫌いの子どもたちに対して)の報告。教師は、こういう授業がし

たい(質問が出る,論議ができる,体験させたい)という願いを持っている。webMathematica(携帯電話でも利用可能)を使用し,この願いを少しでも達成しようと取り組んでいる。少し意見が出たが,数学嫌いの子が好きになるような手立てとはいえなかった。

4. 討論『勉強』と『学び』をつなぐもの~実践報告を受けて~」 討論会司会(武沢 護)



登壇者(武沢 護・下山裕子・橋場弘和・吉田賢史)

武沢:3人が話されたキーワードは,「主体的・発見的・実験的・議論する」等であった。3人に共通している点は,ITは支援ツールであることだと言える。佐伯先生の基調講演についてどう思ったか。

下山:難しいと内容だと思った。教師は目標に対して学習を進めている。子供たちがそれをどのように迫るかが学びだと思っている。

橋場:勉強と学んでいくことはわかる。授業する立場からするとやらなければならないことがあり,どんな流れを起こせばいいのか聞きたかった。

吉田:印象に残ったのは「学力低下」の部分。遊びが大切だという部分。私が授業で勉強するなといった。勉強(強いて勉めるもの)はいやいやするもの。学習(自分で考えるもの)をしなさいといった。遊びの大切さは佐伯先生の話と共通していた。

武沢:「教科教育の中でPCをどう使っているかについて」小学校ではどんな実践があるか。

下山:理科の学習で「からだ」について,URLをインターネットで調べておいて見せた。見た後必ず感想を書かせるようにしている。(知識を受けてどう思ったか,考えさせる場面を設定している。)国語科でPCを使ってガイドブック作成をさせている。

武沢:佐伯先生の話の中で佐藤学先生が教科の枠組みを考え直す話もあったが,中学校・高校では,伝統的な教科もあるので大変だと思うが。

橋場:理科の先生から実験の前に数学でやってほしいことがあると言われている。教科も時期的にあわせることが必要。

吉田:高校では化学のPH(ペーハー)は,先に教えておいてほしいという話があった。

武沢:総合学習ができた経緯のひとつに教科再編もあったように聞かすが,伝統的な教科の枠組みはこれでいいのか。フロアーからも意見を聞きたい。

大橋(千葉県高校):下山先生の体育の跳び箱と佐伯先生の話がリンクし,周縁的な評価がされていると思った。友達の飛んでいる姿を評価しあっている。鑑識眼的な見方ができるのではないか。もう一点,数学の話が出ていて,役立つとか他教科との関連とかへのこだわりが出ていますが,こだわりはいらぬのではないか。数学そのもののおもしろさを感じさせることができるのであっていいのではないか。試行錯誤させていると時間数が足りなくなるのではないか。

下山:そういう見方もできるのかと思った。

橋場:私も数学自体がおもしろいと思っている。教科の持っている目標を学ばせたいとも思っている。目からうろこが落ちるような場面があると「やってみようとか」、「がんばってみよう」とかいう気持ちわくのではないか。

吉田:数学が役に立つから学習するとは思っていない。解ける解けないかが問題ではなく,数学のおもしろさや楽しさに気づかせてやるのが大切だと思っている。塾なんかに行っていると知識だけ覚えていて,楽しさを知らない気がする。試行錯誤では授業時間数が足りないことはそのとおりだと思う。Webベースだと授業時間外に見ることができる。

生田(都立大):遊びの話があったが遊び自体を見直してみる必要がある。遊びの時間・遊びの場・遊びの仲間が次々と壊れてしまった。遊びが変貌している。この遊びと佐伯先生の言われた遊びをよく検証してみることが必要。高校では,総合学習は無理だと思っている。小学校では雪が降れば先生と一緒に雪遊びができる。高校ではそうできないだろう。

＜ CIEC 第 46 回研究会 ＞

武沢：佐世保事件があったが、最近の子供の遊びはどうか。

下山：最近遊びというとゲーム。「ゲームの中では人は死んでも生き返られるが、現実は違う。」という話を教室ですると「わかっている。そんなのはあたりまえやないか。」という話が帰ってくるので、ああした子供ばかりではないと思う。

橋場：部活に熱中している子もいるので、ゲームばかりではないと思う。

吉田：チャットには待っている子がいる。

武沢：2チャンネルにはまっている子がいる。

神戸大学大学院生：実際にコミュニティーの中でどんな目的で勉強するのか先生たちは教えているのか。親たちにどう伝えているのか。自分の経験では途中でこんな目的だと突然伝えられることがあった。見通しが立たないことがあった。

下山：学習の中でのめあては、各教科の目標に到達できるようにということが一番。

橋場：生徒自身のどのような人生設計をなさいたいと思っていることと同じことを聞かれていると思う。とてもレベルの高い話だと思う。

武沢：佐伯先生が言われた「教師は半歩前へ！」という言葉が印象に残っている。適切なアドバイスができるようになりたいものである。

高橋（神戸大学）：実際毎週授業をする場合、理論をとかやく言わず、実践は実践となりやすい。でも、それだけではいけないので、理論と実践が同じものになることを佐伯先生は説いているのだと思う。学習指導要領にも各教科の目標に「人間性を養う」部分か書かれているので、そうした目標を授業においても学ばせなければならないと思う。

武沢：時間が短い中だったが、ありがとうございました。

「大学生協の学生向けパソコン提案の取り組みと実際」

日時：2004年7月3日（土）14時～17時30分

会場：大学生協杉並会館

報告1 『2004学芸大PC報告～必携、その後・・・』

石黒 伸享（東京学芸大生協 店長）

報告2 『人材育成大学と生協「学生生活応援講座」』

元村 雅登（福島大生協 専務理事）

（敬称略）

昨年の第37回研究会では、2004年4月の法人化に向け、国立大学が「情報教育」環境充実のために取り組んでいる「PC必携化」や、「学内での学生個人PC利用環境の整備」について、教員の立場から、大学生協に対して今後どのようなことが望まれていくのかにまでわたってご提言いただいた。

それを踏まえ今研究会では、実際に新入生に対してPCを提供する側である大学生協の立場から、二生協の実践について報告を受けた。

学芸大からは、PC必携化二年目を迎えるにあたり、大学側からあらためて機種選定の際にリクエストされた内容や、販売についてのシビアな要求などと合わせて、販売時における接客内容や使用開始後のセキュリティ対策や修理対応など、実際に購入者から求められるサポート内容や販売担当者としてのスキルについてなど、いかにして大学側に「パソコンの提供元として生協を選択してもらうか」という視点で報告された。

福島大からは、大学法人としての中期計画に掲げられている「人材育成」を、生協自らのミッションとして位置づけていること、その上で生協が大学に貢献する立場で、単なるコンピュータ教育としてではなく、人材育成の一環として行った今年度のパソコン講座について報告された。その中で、PCを購入し参加する新入生のみならず、講座そのものを中心となって計画・実行する学生スタッフと、スタッフを後押しする立場の生協職員の成長も含めた、総合的な人材育成がすべての根本となることが強調された。

【各報告及び質疑で出されたポイント】

『学芸大』

・学内にある生協は、大学から見れば逃げられない存在。生協としても逃げるつもりはない。

生協側としては、申し込みに対し供給数量を不足させるわけにはいかず、サポートや修理対応など逃げ



るわけにはいかない。

・「サポート」の意味を曖昧にせず、様々な側面から考えるべき。

仕様を大学の利用環境に限りなく近づけることや、販売接客時に最大限納得して購入してもらうこと、ウィルス等の重大問題の告知などを行うこともサポートである。

・大学生協だからできること、求められること。

日常的な対応と情報の蓄積ができ、他大学の事例交流ができ、トラブルの切り分けのためのスキルを持っているなど。

・大学生協が、大学という教育現場のキャンパス内に存在するということは・・・。

教育環境に適合した商品・サービスを提供し、同時に啓蒙活動や教育活動の一端を担うべき使命を背負うということ。



『福島大』

・「パソコンを売っている」のではなく、人材育成を目指した「学生生活応援講座」である。

パソコンスキルを持つことは福島大生にとって将来のために必須である。教育・人材育成という視点で、パソコンを学ぶのではなくパソコンを活用した大学生生活の送り方を学ぶための講座。

・大学の目標と生協ミッションをリンクさせ、その中で学生の学生生活を見据えた計画を行う。

人材育成大学であること、キャンパス特性、在学中の生活及び卒業後も視野に入れ、4年間の学習プランを立てる。

・目標は人間としての成長(人材育成)である。

参加者、学生スタッフ、生協職員の関わったすべて

の人が、学生として、人間として成長していくことが最終目標である。

・学生スタッフの力や主体性をどう生かし、どう尊重していくのか。

取り組みが広がり、販売台数も増えていけば、ますます生協職員だけの力だけでは支えきれなくなってくる。



【報告とその後の総合討論から、今後の課題・研究テーマとすべき内容】

キャンパス内に存在する大学生協が、PCを提供しサポートすることに対し求められること、大学法人・購入者・メーカーの立場及び、教育という視点から、再度確認する必要がある。

・教育・学習の道具としてキャンパスPCを捉えた時に、現状の内容で満足なものであるのかどうか。

・日常的に取り扱う修理含むサポート情報の蓄積、あるいは共有をどのように行っていくのか。

・セキュリティ対策やトラブルシューティングなど、相談窓口としてのスキルアップが不可欠である。

これまで販売後のサポートとして取り組まれてきていた各種PC講座が、単なるPCやアプリケーションの操作スキル獲得のためのものではなく、参加者・関係者の「学びと成長」を育むものへと変わってきているという事例が報告された。今後必要とされていくサポートとは何かを検証する。

・学内組織として、学生自身の力を生かしていくことで、どのように学生の「学びと成長」を促していくことができるのかについて着目すべきではないか。

・学生生活の道具として使いこなすためのフォローアップをどのように行っていくのか。

＜韓国訪問報告＞

日時：2004年9月19日（日）から22日（水）4日間
訪問先：国立全北大学校（Chonbuk National University）
全州高等学校
全州女子高等学校
（大韓民国全羅北道全州市）

CIECにおける国際交流活動での初めての企画として9月下旬に韓国を訪問した。短い期間の公募ではあったが事務局を含め、総勢10名の視察団を組むことができた。今回の目的は、韓国での高等教育ならびに後期中等教育における情報教育ならびにコンピュータ利用教育の現状を視察し、現地の研究者や教育者との交流を深めることである。

全州市は全羅北道の道庁所在地であり、人口約60万人で全羅北道の経済、文化、教育の中心として、古くは後百済の王都だった歴史をもつ韓国の中核都市の一つである。また、韓国料理を代表するビビンパブはここ全州が発祥の地とも言われている。

まず、最初の訪問先は全北大学校であった。この大学校は13の単科大学（日本でいう学部に対応）からなる総合大学である。ここでは、同行の小林先生（新潟大学）の旧知であるキム教授とリー教授の案内で同校の物理教育におけるコンピュータ利用教育や教養教育における情報教育の現状を見学した。キム教授らの努力によって開発され蓄積されているWeb教材やコンピュータ利用教育の先進的な取り組みや、教養教育における情報教育からは全北大学の教授陣の熱意が伝わってきた。

二日目はキム教授、リー教授のご尽力で市内の全州高等学校と全州女子高等学校を訪問することができた。両校はそれぞれ男子校、女子校として道内きっての名門校であり、ともに古い歴史と優れた教育を誇っている学校である。

全州高等学校は新校舎建築中で、新しい校舎の一部の施設を見学した。また、高校1年生には必修で2単位の情報教育が展開され日本の事情に似ていた。異なる点は、韓国政府主導で進展中のe-learning教材が利用でき、生徒たちの学習に活用されていることである。わが国ではまだ高校段階では十分普及していないe-learningだが、韓国ではいち早くWeb上での学習コンテンツが開発され、活用されていた。また、各教室の黒板の横には大型プロジェクタが設置され、教師卓にはPCが埋め込まれており、普通教室でのPC提示環境が整備されていた。わが国のミレニ

ウムプロジェクトの韓国版といった趣だった。

全州女子高等学校では、日本留学経験のある英語の教員が案内役となり、日本語でいろいろ質問することができた。この学校にも全州高等学校同様、各教室に大型プロジェクタが設置されており、普通授業にも活用されやすい環境が整っていた。また、同校にはサイバー教室と名付けられた施設があり、我々が訪問したときはちょうど2年生がe-learning教材を使って物理の授業を受けていた。

両高等学校とも高い大学進学率を誇る名門校だけに通常の授業はもちろんのこと、ITを積極的に取り込んだ教育にも非常に熱心に取り組んでいた。そして、授業形態は伝統的なスタイルではあったが、何よりも生徒たちの授業中における真摯な態度が印象的であり、韓国の教育に対する意気込みが、生徒たちに浸透している様子がうかがえた。

今回は全州市という韓国の一都市の現状を視察しただけなので、このことだけで韓国の情報教育やコンピュータ利用教育の全体を論ずることはできないが、IT教育を推進する国家的な施策として施設・設備面での充実が強力に推進されている状況を目の当たりにすることができた。そして、わが国とは教育制度も異なり一概には比較できないが、国の教育に対する姿勢とそれを支える教員、それに応える生徒たちという構図は、わが国よりも明確のように思えた。

今後、教育界にあっても、例えば、日本、韓国そして中国などが連携して、コンピュータ利用教育、情報教育を含めた教育について議論したり、若い世代を交えながら交流を深めたりすることが必要になってくるであろう。そしてアジア地区から新しい世紀の新しい教育の流れが創り出せたらどんなに素晴らしいことだろうかと感じた4日間であった。



＜2003年度 第2回 CIEC 理事会報告＞

日時：2004年8月4日（水）午前9：00～午前11：00
場所：神戸大学神大会館A会議室

出席：佐伯，松田，矢部，青木（由），赤間，綾，石川，
板倉，一色，指宿，上村，奥山，小野，籠谷，熊
澤，榊原，武沢，立田，田中，筒井，鳥居，中村，
松浦，宮本，森（夏），森（直），吉田，若林，和
田（勉），和田（寿）

監事：今国

選挙管理委員長：尾池

オブザーバー：青木（史），生田，大岩，大橋，島田，橋
中村（泰），中村（宗）山口，山崎

事務局：野口，中田，羽田

欠席：小西，小林，仲田，野澤，原田，平井，湯浅

議題および討議内容：

はじめに，議長として若林理事を選出した。また，2004年度理事会選挙当選人および尾池選挙管理委員長のオブザーバー参加を確認した。

1．2004年定例総会議案確認の件

矢部副会長から定例総会議案書に基づき提案がされ，総会提案内容を確認した。また，2003年度入会者（個人および団体），脱退者（個人および団体）についても一覧表に基づき確認した。

次に，今国監事から，2003年度財政報告に関する監査所見が報告された。

2 定例総会の運営に関する件

事務局から定例総会の運営に関し，提案を行い，一部修正事項を含めて確認した。なお，修正した運営マニュアルを総会までに関係者に配布することを確認した。修正事項は以下のとおり。

なお，総会スケジュールがPCC大会プログラムに記載されていない点が指摘され，事情説明を行うとともに，CIEC会員が混乱しないように掲示を徹底していくことを確認した。

- ・監査報告に関して，議案の一部とすることを修正する。議案2の決算報告承認の件に監査報告を含まず，監査報告は独立したものとして取り扱う。

- ・欠席している湯浅副会長に代わり，「意見用紙の紹介と回答」「討論のまとめ」については，矢部副会長が行う。

3．2004PCカンファレンスの最終準備状況の確認

事務局より，参加申し込み状況および最終準備状況について報告した。準備状況に関しては，問題なく，進

められていることを確認した。

4．部会の組織および運営に関する規則の制定の件

矢部副会長から提案がされ，3つの修正事項を含めて確認した。修正文書は，提案者である矢部副会長に一任することとした。修正内容は以下のとおり。なお，現行の部会は，規則の制定に伴い，新しく部会申請をしてもらうこととする。

- ・部会の運営について，理事会が意見を述べ，その活動に関して勧告をできることとする。

- ・部会の解散については，部会員の2/3以上の同意ではなく，世話人が解散をすることができるようにする。

- ・部会の活動実績がない，活動報告がない，休眠状態に陥ったときなど，理事会は部会を解散させることができることとする。

5．手当てに関する細則決定の件

事務局からこの間のML討議をもとに，海外渡航手当について提案を行い，その他のCIEC会員の講演・報告者の手当てについては，他の手当ても含めて，早急に整備していくことのみを確認した。

なお，今回のPCCに関する手当てについて次のように確認した。CIEC研究会と切り離して手当てを至急すること，単なる研究報告と講演・シンポジウム報告などは分けて手当てを支払う。

6．学会表彰実施確認の件

7月の理事会MLにて確認した内容についての実施状況と今後の計画について，確認を行った。なお，今後の計画について，学会賞の報告について，受賞しなかった候補者記載については取りやめ，推薦件数と人数のみを記載することを確認した。

また，選定に当たった委員より，来年に向けては委員の人数を増やしてはどうかとの意見が出され，検討していくこととした。

7．今回の役員選挙の対応確認の件

7月ML確認内容について，再度確認を行った。総会場で説明を行い，参加者の確認を得ること，次年度に向けて規約関係を整備していくことを改めて確認した。

8．次期運営・体制およびスケジュールに関する件

2004年度への申し送り事項として，第1回理事会での運営委員の選出，申し送り事項の確認，概要スケジュールなどを提示することとした。

< 2004年度 第1回 CIEC 理事会報告 >

日 時：2004年8月4日（水）午後7:20～午後8:00

会 場：神大会館 2階A会議室

出 席：佐伯，生田，矢部，若林，青木，赤間，綾，石川，板倉，一色，指宿，上村，大岩，大橋，奥山，籠谷，熊澤，榊原，島田，武沢，橘，立田，田中，筒井，鳥居，中村（彰），中村（泰），松田，森（夏），森（直），山口，山崎，吉田，和田（勉），和田（寿）

欠 席：湯浅，小西，小林，仲田，野澤，宿久

総会終了後の短時間の理事会であることから，議長として矢部副委員長を選出し，直ちに議案の確認を行った。確認事項については，各議案の報告事項を参照。

1．副会長の担当・事務局長選任・運営委員の互選に関する件

矢部副会長から一括提案され，以下のように確認した。

(1) 副会長の担当分担（事務局長含む）

副会長の任務分担については，内容のみ確認し，後

日，会長・副会長打合せで取り決めることを確認した

・専門委員会（会誌編集委員会/カンファレンス委員会/ネットワーク委員会/国際交流ワーキング）

・PCカンファレンス 湯浅（2005担当としてすでに決定済み）

・団体会員・協賛企業

・日本学術会議・他学会・他団体渉外

・財政

・ニューズレター

・事務局管理

・プロジェクト選考委員会

・学会賞選考委員会

(2) 事務局長の選任

生田副会長に事務局長を兼任していただくことを確認した。

(3) 運営委員の互選に関する件

以下の確認を行い，直ちに運営委員の選出を行った。運営委員は以下のとおり。

・定数5名以上15名以内

・専門委員会の正副委員長は1名以上が運営委員に立候補

・部会世話人代表は円滑な活動を行うために，運営委員になることが望ましい

【運営委員】個人理事10名，団体理事2名

赤間，綾，一色，板倉，小林，武沢，立田，野澤，松田，森（夏節），山口，和田

2．各専門委員会の体制に関する件

専門委員会の組織および運営に関する規則を参照し直ちにそれぞれの委員会にて，2005年度専門委員を選出していくことを確認した。

3．2004年度への申し送り事項検討の件

これまで検討に挙がっているものについて確認を行った。具体的な検討スケジュール・検討体制等は，今後機関会議を開き，確認していくこととした。

(1) 会員名簿の作成と名簿管理

(2) 倫理規定，セキュリティポリシーの作成

(3) 遠隔地TV会議システムの検討

(4) 団体会員の維持・拡大策の検討

(5) 企業協賛プロジェクトの具体化

(6) 手当て他，諸規定の整備

(7) 会則（役員選挙規約を含む）の改定検討

(8) メールマガジンの発行検討

(9) 英文誌の発行計画具体化

(10) 事務局作業の軽減策検討（会員管理システム構築の検討）

4．2004年度機関運営スケジュール（予定）の確認

1～2ヶ月前に開催日を確定させ，開催通知とともに連絡することとした。

2004年12月19日（日）10時～13時

第1回運営委員会

・事業計画の到達点と残課題の確認

・概算見通し・概算予算計画・プロジェクト費用決定

・プロジェクト募集計画

・学会賞実施計画

2005年3月20日（日）10時～13時

第2回運営委員会

・04年度事業報告と05年度事業計画概要の確認

・専門委員会・部会報告と計画概要の確認

・04年度決算見通しと05年度予算の作成

2005年5月29日（日）10時～13時

第3回運営委員会

・総会議案の作成

・年度計画の具体化検討

2005年8月5日（金）9時～11時

第2回理事会

2005年8月5日（金）～7日（日）

2005PCカンファレンス（新潟）

＜2004年度CIEC定例総会報告＞

日時：2004年8月4日午後6時15分～7時20分

会場：神戸大学 神大会館 六甲ホール

出席：本人出席56名、書面76通、委任状29通

議事

1. 開会宣言および正副議長、資格審査委員の選出
一色理事(高知女子大学)より、開会宣言。引き続き理事会推薦による次の委員候補者が提案された。議長には武沢理事(早稲田大学高等学院)、副議長には森夏節理事(酪農学園大学)、資格審査委員には上村理事(北九州市立大学)と和田勉理事(長野大学)。他の立候補者がいないことを確認し、拍手にて選出を確認した。
2. 総会運営に関する確認および会長挨拶
武沢議長より、総会運営に関して会則および運営規約の確認が行われた。引き続き、佐伯会長より、2004年度定例総会開催に際し、挨拶が行われた。
3. 議事運営、採決方法の提案と確認
武沢議長より、本総会の運営方法および採決方法について次のとおり提案され、確認をした。
「提案は役員選挙以外は連続して提案し、提案後一括して討議。採択は、議案ごとに個別におこない、かつ連続して採択。議案5を除き、すべて出席者の過半数の賛成で議決。議案5については、出席者の3分の2以上の賛成で議決。」
4. 議案1から議案6の一部までの一括提案
矢部副会長より議案1「2003年度事業報告と2004年度事業計画承認の件」、松田副会長より議案2「2003年度決算報告承認の件」、議案3「2003年度収支差額処分承認の件」、議案4「2004年度予算承認の件」の提案がされ、引き続き、辻監事より監査報告がされた。
続けて、矢部副会長より議案5「会則の一部改定承認の件」、議案6「団体会員の理事選出の件」の提案がされた。
5. 討論および意見用紙の紹介と回答
討論に先立ち、矢部副会長から総会に寄せられた意見用紙の紹介と回答がされた。
武沢議長より、討論は全議案一括して行うことが告げられ、討論に移った。
議案書の貸借対照表の未収入金の項目と2003年度財政報告の団体会費収入の未納金額の違い、団体未納金を未収入金にしない見解について質問が出された。矢部副会長および今国監事からCIECでは確実に収入として翌年計上されるもの以外は未収入金として計上し

ていない、そのような会計処理もあるとの回答がなされた。

6. 議案1から議案6の一部までの採択
上村資格審査委員より、出席状況、成立状況が報告され、拍手で確認した。
武沢議長より討論の打ち切りが告げられ、採択手順(議案ごとに個別かつ連続的に採択)説明後、直ちに採択に移った。結果は、議案1から議案6の一部まで圧倒的多数で採択された。(なお、出席賛成者数および委任状に書面議決書の数が加算された)
7. 議案6役員選挙の件
選挙管理委員長の報告に先立ち、矢部副会長から今回の選挙に関する役員定数の取り扱いに関して、理事会決定の報告が説明された。
続けて、尾池選挙管理委員長より、今回の役員選挙実施経緯および役員選挙結果について報告がされ、立候補者全員が当選人となったことが報告された。全員拍手で確認した。
8. 新役員の紹介
佐伯会長より、壇上の新役員の紹介がされた。
9. 閉会
森副議長より、議事終了が告げられ、正副議長の解任とCIEC定例総会の閉会が宣言された。



献本いただきました！

- 2003年10月 『翻訳に役立つ Google 活用テクニック』
安藤進著 丸善（株）
- 2003年11月 『解決思考で学校が変わる』確かな学力
の基礎にあるもの赤堀侃司著ぎょうせい
- 2003年12月 『デジタル教材の使い方・活かし方』未
来の教室の元気な子どもたち
- 3年後の授業はこう変わる！ -
任都栗 新著 PHP 研究所
- 2004年05月 『Googleに聞け！英語の疑問を瞬時に解
決』安藤進著 丸善（株）
- 2004年09月 『The BNC Handbook コーパス言語学への
誘い』
ガイ・アシュトン ルー・バーナード著
松柏社（株）

◇ CIEC 学会賞 受賞者のお知らせ ◇

- ・公募開始 2004年1月6日
・公募締め切り 2004年4月30日
・審査 2004年6月30日
・表彰者の決定 2004年7月10日
- 学会賞・功労賞推薦書3件、学会賞・論文賞推薦書6件の中から、表彰規定に基づき、以下の方が選出されました。2004PCカンファレンスレセプションの中で、赤間学会賞選考委員会副委員長から報告があり、佐伯CIEC会長から通知書、表彰盾、賞金（3万円）が授与されました。
- <学会賞・功労賞>
受賞者名： 奈良 久
受賞件名： CIECを設立から学術団体会員となるに至るまで成熟させたことへの功労
受賞理由： CIECの設立において指導的な役割を果たされるとともに、初代CIEC会長としてその基礎を固め、さらに学術団体会員として発展するうえで大きな貢献をされました。
- <学会賞・功労賞>
受賞者名： 板倉隆夫，熊澤典良，吉野 孝
受賞件名： CIEC TypingClubの開発・改善と普及
受賞理由： CIEC TypingClubは「だれでもが使えるコンピュータをめざして」、より容易にタイピングを習得できるように改善が積み重ねられ、CIECの提供するソフトとして全国の教育現場で利用され、多くの入門者が受け入れるまでになりました。
- <学会賞・論文賞>
受賞者名： 妹尾 堅一郎
受賞件名：
・「学習コミュニティを支えるメディア環境：『社会調査法』の6年間に見る学習環境の変容』『コンピュータ&エデュケーション』Vol.13, pp.123-131, 2002
・「学習コミュニティにおける「支援者」の役割：慶應SFC『社会調査法』におけるコラボレーションの実際』『コンピュータ&エデュケーション』Vol.14, pp.62-70, 2003
受賞理由： 二編は、メディア活用型授業「社会調査法」で実践したプロジェクト型・コラボレーション型教育の成果とそこから得られた教育のあり方を考察したものであり、メディア環境利用教育やメディア環境の変化と学習主体との関連について論じており、実践的であるとともにCIECへの問題提起的な試みです。また、論文は、「学び合い・教え合い」という「互学互修」モデルを構築する前提になっております。



< CIEC 会員入退会者のお知らせ >

2003年度(2003.4.1 ~ 2004.3.31)

CIEC 会員 入会者

吉岡 敏子・内赤 尊記・江花 輝昭・岡田 富美子・飯島 修治・谷崎 裕明・望月 将行・能田 洋平・平澤 茂一・松本 豊司・小松 祐子・大森 義行・後藤 正幸・眞壁 豊・長谷川 信・原口 攻一郎・水野 邦太郎・杉森 直樹・竹内 光悦・石原 裕・影森 徹・吉村 俊子・中田 辰也・今村 洋美・菊地 眞幸・川上 諭・簗島 隆・西田 廣和・水本 光美・池田 隆介・吉野 孝・遠藤 洋子・巳波 義典・藤井 崇史・北原 雅晴・西川 勉・堀江 雄二・山田 洋文・三原 信一・田中 武史・三代川 律子・中山 迅・平川 佳世・平嶋 宗・稲垣 成哲・伊達 則彦・岡田 悠佑・小杉 和宏・青木 浩二・齋藤 淳一・栗山 健・山口 宗寿
関 浩一・小川 昇・駒田 忠一・植村 八潮・辻本 利雄・大和田 栄・坂口 晴一郎・松久 昌子・峯村 努
・石坂 雅文・小川 博・川端 成実・今井 兼範・大塚 一徳・梅田(笛田)美和子・森安 力・茂垣 薫・水口 智子・佐藤 宗治・劉 学軍・杉本 美穂子・赤堀 侃司・中田 剛・呉 鞠・和田 武・日裏 彰人・岡田 淳芳・米川 覚・武藤 泉・中條 清美・古金谷 博・北道 淳司・迫村 純男・小川 裕之・下園 幸・西垣 知佳子・岡田 昭夫・小原 格・原田 徹・木村 みどり・尾畑 裕・呉 鴻春・角 和博・西垣 順子・小森 良隆・山本 義郎・森 裕一

(以上 101 名)

□ CIEC 会員 退会者 □

相曾 益雄・朝田 尚子・安藤 豊・池田 泉・一樂 信雄・伊藤 あづさ・大西 美由紀・河原 順子・北川 由紀・木下 裕子・後藤 光伸・竹内 研四郎・永田 亮・中津山 幹男・鳴尾 芳一・野口 亜希子・蓮見 澄・堀江 慎一・本多 博之・三浦 靖・宮下 英明・山口 晴久・米満 潔・渡邊 隆・安田 早苗・内田 一徳・遠藤 光暁・工藤 健寿・高見 寛・田淵 隆明・鶴田 宏樹・手塚 芳一・成澤 芳男・橋本 清勇・林 義樹・平松 大樹・本間 敬之・山田 洋文・山本 忠宏・渡辺 春雄・篠原 幸喜・菅原 いづみ・染谷 真理恵・園田 啓示・高橋 創・藤村 健司・松浦 弘智・山香 昭・小森 佐知子・設楽 千佳子・田畑 俊幸・岡安 喜三郎・小野寺 忠・川北 準人・時乗 洋昭・増本 淳子・武笠 和夫・村田 利裕

(以上 58 名)

